

「あなたの思い出売ります」

— 1 稿 —

2026/08/22

山極 瞭一朗

〈人物表〉

麻木 蓮一郎 あさぎ れんいちろう

(27)
会社員

笠原 雫 かさはら しずく

(24)
蓮一郎の元恋人

古淵 辰之助 こがち たつのすけ

(64)
古物商・「メモリユース」店主

女性

水族館・スタジアム（昼）

イルカショーの真っ只中。

大勢の客がリズムに乗って手を叩きながらショーを楽しんでいる。

その中に、麻木蓮一郎（27）の姿。イルカには目もくれず、隣にいる恋人の笠原雫（24）を凝視している。

蓮一郎「今、なんて言った？」

雫、イルカを見ながら、

雫「別れたって」

蓮一郎「今言う？」

雫「今しかないって」

イルカがジャンプ。水しぶきが客席に飛び、観客たちは悲鳴に似た歓喜の声。

雫「これ以上楽しくなったら、言えなくなりそうで」

蓮一郎「楽しくていいじゃん。俺は楽しいよ、雫って」

雫「もう違うの、違うって思っちゃったの」

蓮一郎「何が？ 4年だよ、もう4年一緒にいるじゃん」

雫、蓮一郎を見つめて、

雫「それって、情だよ」

蓮一郎「え？」

雫「純粋な好きって気持ちじゃなくて、4年も付き合ったから、手放したくないって、そういう……」

蓮一郎「いやいや……」

イルカショーはクライマックス。

イルカたちは立て続けにジャンプ。

雫「昨日今日で決めたことじゃないの」

蓮一郎「雫……」

雫「ごめん」

蓮一郎「……俺は嫌だよ」

雫「家にあるもの、捨てていいから」

イルカショーはフィニッシュ。

盛大な拍手に包まれる。

蓮一郎、呆然としている。

2. アパート・蓮一郎の部屋（タ）

10畳ほどのワンルームの部屋に、多数のキャラクターや動物のぬいぐるみがある。

蓮一郎、入る。玄関傍の棚に鍵を置くと、写真が目に入る。

キャラクターのぬいぐるみを中心に、蓮一郎と雫が肩を寄せ合っている。笑顔の2人。

蓮一郎、ため息。部屋に上がると、そのままベッドにダイブ。ひとつぬいぐるみを手に取る。

クマのぬいぐるみである。笑顔のそれは、蓮一郎をじっと見つめている。

蓮一郎「どうすっかな、これ……」

蓮一郎、ゆっくりと起き上がり、周囲を見渡す。

ぬいぐるみの数々。

3. アパート・外観（夜）

月明かりがアパートを照らしている。

4. アパート・蓮一郎の部屋（夜）

蓮一郎、ベッドで横になり、スマホを操作している。

『彼女と別れた　もの処分』と検索。

知恵袋や掲示板のサイトがずらりと表示される。

蓮一郎、流し見しながらスクロール。すると、ある古物商のサイトを見つけ、タップ。

『あなたの思い出売ります』ときらびやかな文字が表示される。

5. アパート・外（昼）

軽自動車が停車中。

蓮一郎、部屋から大きな袋を抱えて出てくる。後部座席に置く。

中からぬいぐるみがひとつ、はみ出す。

蓮一郎、運転席に座り、発進。

6.

「メモリユース」・外観（昼）

路面店。外壁には大きく『あなたの思い出売ります』と記されている。

7.

「メモリユース」・店内（昼）

幅広い店内。大型家具や骨とう品などから、ゲームやトレーディングカードまで、多種多様なものが陳列されている。

客足はまばら。

奥の買い取り受付スペース、店主の古淵辰之助（64）は若い女性客に相対している。

古淵、1万2千円をトレイにのせて女性に渡す。

古淵 「こちらが思い出の金額となります」

女性 「1万ちよつとか、もう少しいくと思ったんだけど」

古淵 「あなたの思い出は、誰かの――」

古淵が言い終える前に、女性は立ち上がり、

女性 「また売りたいもの出てきたら来るね」

古淵、穏やかな笑みを浮かべて、

古淵 「いつでもお待ちしております」

女性は出入口へ。

すると、大きな袋を両手に抱えた蓮一郎が入る。女性と目が合い、バツが悪そうに苦笑。

女性 「売りにきた感じ？」

蓮一郎 「ええ、まあ……」

女性は振り返り、

女性 「店長、お客さん」

古淵、奥からやって来て、

古淵 「いらつしやい」

× × ×

買い取り受付スペースで、蓮一郎は古淵と相対している。ぬいぐるみの入った袋を台に置き、

蓮一郎 「これって……売れますかね？」

古淵、手袋をはめる。

古淵 「もちろんですよ」

蓮一郎 「ほんとですか？」

古淵、袋から丁寧にぬいぐるみを取り出す。

古淵 「持っていて犯罪になるもの以外、うちではすべて買い取っています。ネジ1本でも」

蓮一郎 「ネジ1本」

古淵 「誰かにとって不要となったものは、またある誰かにとっては必要なものになるんです」

蓮一郎、じっとぬいぐるみを見つめて、

蓮一郎 「不要……」

古淵、蓮一郎を窺い見て、

古淵 「少し、店内見ていかれます？」

蓮一郎 「え？」

古淵 「ほしいもの、あるかもしれませんよ」

× × ×

蓮一郎、古淵に案内され、店内を散策している。

古淵、とある陳列棚の前で立ち止まる。

古淵 「これ」

蓮一郎、古淵の示す方を見る。

ネジ1本が陳列されている。10円。

蓮一郎 「売れます？」

古淵 「定期的に売れては、新しいものが来ます」

蓮一郎 「物好きがいるんですね」

古淵、ふっと微笑み、すぐに笑みを消して、

古淵 「売りたいくないように見えます」

蓮一郎 「はい？」

古淵 「ぬいぐるみ、それぞれ名前とかあったりしますか？」

蓮一郎、ぎこちなく笑って、

蓮一郎 「クマはクマ。ネコはネコです。雫、そういうタイプじゃなかったんで」

古淵 「そうですか」

蓮一郎 「あ、でも、それぞれのキャラクターには、それぞれの名前が……って、当然ですよ、いいですね、いいですね」

古淵 「いえ、愛着があることは伝わります」

蓮一郎「売りたいとか売りたくないとかじゃなくて……」

古淵、蓮一郎を見つめる。

蓮一郎「捨てなきゃとは思うんです、別れたんで。別れたから、いても意味ないっていうか。一緒じゃなきゃ」

古淵「わかります」

蓮一郎「わかりますか？」

古淵、ひとつ頷き、

古淵「私は、あなたの思い出を買い取り、誰かにとっての宝物にすることが出来ます」

蓮一郎「……宝物」

古淵「ただそれは、あなたの宝物でない場合に限ります。あなたがまだ宝物だと思っているのなら、私は誰かに売ることはできません」

蓮一郎、苦笑して、

蓮一郎「変な人ですね」

古淵「私が？」

蓮一郎「『売るのはやめとけ』っていう買い取り業者はいないと思います」

古淵、不意に切なそうな表情を浮かべて、

古淵「一度手放せば、簡単に戻ってくるわけじゃないですから」と、穏やかな笑みに戻り、

古淵「だから、本当に宝物でなくなったときに、売ればいいんです。焦ることはありません」

蓮一郎「……持って帰っていいですか？」

古淵「もちろんです」

8.

「メモリユース」・外（夕）

夕日が差している。

蓮一郎、ぬいぐるみの袋を軽自動車の後部座席にのせる。そして古淵に向き直り、

蓮一郎「ありがとうございました」

古淵「またいつでもいらしてください」

蓮一郎「はい」

古淵「あなたの思い出を売らせていただきます」

蓮一郎、ふっと笑みをこぼし、

蓮一郎「だけど、まだ先になりそうです。もう少し足掻いてみよ
うと思います」

古淵、頷く。

蓮一郎、運転席に乗り込む。古淵に会釈し、発進。

古淵、深々とお辞儀をして見送る。

9.

アパート・蓮一郎の部屋（夜）

ぬいぐるみたちがきれいに並べて置かれている。

蓮一郎、電話中。

傍らに置いたスマホはスピーカー状態。相手は雫。

蓮一郎「ごめん。俺やっぱ、未練ある。もう一度、ちゃんと雫と
向き合わせてくれないかな」

おわり